

第6回「新鋭俳句賞」候補者一覧

2022.10.23

番号	題	俳号	所属結社	会員非会員	男女	年齢	住所
1	道づれ	芳山 遊	麻	会員	男	49	茨城県
2	砂上の文字	木内 縉太	澤	会員	男	27	東京都
3	舞台	森 雅紀	ひいらぎ	会員	男	45	静岡県
4	二度雨	若杉 朋哉	なし	会員	男	47	埼玉県
5	卍固め	上野 犀行	田	会員	男	49	神奈川県
6	白濁	山田 牧	磁石	会員	女	49	東京都
7	啓蟄の窓	松尾 清隆	松の花	会員	男	45	神奈川県
8	絵のない絵本	巫 依子	知音	会員	女	49	広島県
9	出身	篠原 新治	ランブル	会員	男	36	広島県
10	雲 変幻	橋本 朱加	歴路	会員	女	43	東京都
11	汗のかほ	森下 哉美	玉梓	会員	女	46	神奈川県
12	花の雨	前田 拓	炎環	非会員	男	34	東京都
13	骨・腸	水野 大雅	南風・いぶき	非会員	男	47	愛知県
14	表札	池田 瑠那	澤	会員	女	45	東京都
15	眉宇	彼方 ひらく	なし	非会員	男	42	岡山県

第6回 新鋭俳句賞
候補作品集

2022. 10

公益社団法人 俳人協会

第6回 新鋭俳句賞 候補作品集

【目次】 作品の字体・仮名遣いは応募原稿通りとしてあります。

No.	題	ページ
1	道づれ	3
2	砂上の文字	4
3	舞台	5
4	二度雨	6
5	卍固め	7
6	白濁	8
7	啓蟄の窓	9
8	絵のない絵本	10
9	出身	11
10	雲 変幻	12
11	汗のかほ	13
12	花の雨	14
13	骨・腸	15
14	表札	16
15	眉宇	17

第6回新鋭俳句賞候補作品一覧 2022/09

1位5点 2位4点 3位3点 4位2点 5位1点 で評価

NO	題	井上弘美	小島 健	高柳克弘	西山 睦	計
1	道づれ	5			4	9
2	砂上の文字		5	4		9
3	舞台	1		5		6
4	二度雨		3		3	6
5	卍固め				5	5
6	白濁	4				4
7	啓蟄の窓		4			4
8	絵のない絵本	3				3
9	出身			3		3
10	雲 変幻	2				2
11	汗のかほ		2			2
12	花の雨			2		2
13	骨・腸				2	2
14	表札		1	1		2
15	眉宇				1	1

道づれ

堅香子の花や耀歌の山しづか
下萌えの丈に雀の跳ねるたり
風よりも蜂に揺れたる蓮華かな
分蜂の空に翅音の渦卷ける
女王蜂腹をぼるんと横たはる
流蜜の音を頼りにゆく春野
蜂飼ひは北へ向かはむ花は葉に
蜂の眼の昭和新山ふくらみぬ
囀と採蜜のみに暮るる日も
リラ冷えや岸を見せざる留萌川
アカシアの風を計りて野の昼寝
捨て蜜が最も甘し指を蟻
麦わら帽祖父も使ひし枝に掛く
蜂場は元野球場草いきれ
農小屋の門灼くるものとなり
朝採りのばいんばいんの西瓜切る
蝦夷路をくぐりて昏き雨宿り
蝙蝠の匂ふ闇まで蜜しぼる
団栗の径に熊鈴鳴り通し
また戻る顔して去りぬ北狐
道づれの浅葱斑と南下かな
最後まで眸そらさず罷退く
吸ひ殻も落葉もいれる燻煙器
視えてゐて遠き筑波嶺野分あと
老蜂を載みたるのみの帰郷かな
野の菊を添へて明るき蜂供養
鼻に眠らされては眠れざる
また別の蜂にすがりて凍てにけり
蜜匙に削る結晶冬来る
養蜂箱雪の厚さに護らるる

砂上の文字

やどかりや砂上の文字の消えやすき
春ゆやけ渚を犬とあとやさき
裏山に斧置き去れる朧かな
涅槃図の百足は嘆くふうでなし
蜜蜂の羽音少女の内緒事
哺乳びん湯に沈めをる桜かな
連弾の兄とおとうとヒヤシンス
太陽面爆発蝌蚪の生まれけり
浜ひるがほ地球は傾ぎつつ廻る
売店の焼そば鹹き夏の湖
カクテルに小さきパラソル夏の宵
白夜の盤上に王の横倒し
園児どち昼寝の国も駆けまはる
蠅の群象の涙を吸ひあへる
井井と物ありにけり夏座敷
舐め上げてソフトクリーム段失せぬ
魚はぬる夜ぞ湖かこふキャンプの灯
原爆忌降車ボタンがいつせいに
ひぐらしや一指に穿つ砂の城
修道女の眼鏡ぎんぶち蔦かづら
電柱の一本として秋思イッ
あたたむる夜食のラップ露しとど
またぐらにトランク据えぬ暖房車
冬木描く鉛筆の芯尖らせて
その中の一馬嘶く神の旅
狩人のこぼせる息の甘からむ
フレームやいづれの花の腐臭なる
警備室にモニターあまたクリスマス
聖菓切る等分すこしづつずれて
聖樹の灯のみを残して眠りけり

顔上ぐるたびに明るく初茜
戸の隙に光切り立つ朝寝かな
追ひつ追はれつ春暁の寝息かな
料峭や淵の陰れば岩映り
藪に入るあ、うぐひすと思ふ間に
ただいまの一声高し受験果つ
母のよこ胸板厚く卒業す
水の香の風にふくらみ花万朶
曲水の光湧き立つところより
燕や沈思の視野を真二つに
枝先に引つかかりゐる落花かな
がらんどうなる始発バス緑さす
高きまで幹に日の差す若葉かな
結ひたるは丁寧な人粽解く
祭笛故人の法被重ね着て
生きてゐる証と祭法被着る
餡蜜や娘の指輪一つ増ゆ
金網を呑みこんで蔦茂りけり
水を切る勢ひ冷し中華来る
夕蟬や皿を並べて人を待つ
夏の月仰ぐ胸襟開きけり
冷房の音や互に寝たるふり
一切を過去とす茅の輪くぐりけり
皮脱ぎて眼澄みたる蟻蛸かな
野に立つやいなや蜻蛉の渦の中
AIの眉睡ならぬ夜学かな
落葉踏む舞台のごとき明るさに
冬の蜂昨日の窓を離れざる
この路地もユトリロの白冬の雨
大年の雲後戻りなかりけり

梅林の始まりはこの木立より
日当りのよくて乾いて梅の園
新しきほくろ見つけてあたたかし
田舎では何かといへば草の餅
夕桜名残の色となつてゐし
踏切を待てる間の落花かな
夏掛けの一日目より馴染みけり
緑蔭と緑蔭の間の日向かな
踏台の実梅落ちしや置かれしや
さざ波の動いて来たる植田かな
あめんぼう藁に少しく休みをり
さらさらと庭に影して今年竹
かたまつて近づいて来る驟雨かな
喫茶室暗きところに百合の鉢
乱暴な打水にして清々し
避暑の宿スリッパのよく響くこと
夏の雲のみ美しく暮れゆけり
朝顔の登り切つたるところに咲き
秋雨のはじまりにして砂の音
秋涼し日に二度雨の降ることも
雨上がり鬼灯市を見て通る
とんがつてゐるところまで唐辛子
椎の実を拾ふ手にさす日ざしかな
団栗の穴がこちらにもう一つ
つまらんと言ひ捨てて去る柿主
日当りの落葉の上に軽く立ち
手入れて顔を乗せたる炬燵かな
書初の筆滴して晴れてをり
土色の玉も飛び交ふ雪合戦
鉄棒に少し離れて日脚伸ぶ

豆腐屋の喇叭近づく盂蘭盆会

海へゆく途中に画廊秋日和

亡き人の部屋の障子を貼り替ふる

運河の灯赤し玉蜀黍齧る

あたりめのひと脚を割く夜寒かな

ラッパより子規はこはもて木守柿

まだ赤き陽にはじまつて夜学校

どぶろくや議論たきつけられてゐる

鍵束の引つ掛かる釘火恋し

冬紅葉自画像の影描きなほし

肺の奥へつめたき空気波郷の忌

雪だるまの親子へ雪のふりつもる

神木も支ふる棒も枯れにけり

大寒やのどにまとはりつく菓

つばくろやダンス教室まで階段

汐干狩一人にひとつ馬穴据ゑ

藤棚をくぐり月極駐車場

うまさうにものを食ひをり新社員

ハンカチの木の花ぬぐひたき記憶

黒南風や重機は家をなぎ倒し

阿久悠の詞をつぶやきて冷し酒

板の間の蚊遣の豚のなかに灰

江ノ電のあと釣忍ひと揺れす

棹をもて掛くるランプや登山小屋

螢火を数へつくして螢狩

一日をはんざきは岩抱へこみ

弟に卅固めや帰省の夜

星の砂つけサンダルの足帰る

弁天の琵琶のきんいろ夜の秋

椰子の木にさがる椰子の実水中り

白濁

白濁のオリブオイル鳥帰る

春の風邪白壁に鳥影絵なす

うららかや上白糖とグラニュー糖

春の風紙を捨つるに紙袋

うつすらとタオルの湿り夕蛙

鈴の音とすれ違ひたる春の夕

どの辻を曲がれどさくらさくらかな

遅き日の卓下に闇留まりぬ

陽炎へ歩いて行きぬ父と母

湾岸のふくらみ走る日永かな

春夕焼自分のための花を買ふ

蚕豆の小粒ラジオの雨予報

夕薄暑暖簾次々顔通す

白昼やカーテン閉ざす薔薇の家

サンドイッチの美しき切り口緑さす

水を飲む喉の太々緑の夜

小満や生地を捏ねたる手の厚み

文庫の手休めてソーダ水の泡

夕端居眩くやうに爪を切る

噴水の華をあつさり閉ぢにけり

右往左往白皿てふ迷宮に蟻

天井の守宮遅れがちの時計

夏草や望遠鏡に星を待つ

狂ひたる火蛾の羽音の厚みかな

秋暑し缶を溢るる予備の釦

巻貝の欠けの鋭角星流る

少年の指のピストル月へ向く

白息に白息重ね荷を受くる

日脚伸ぶ餃子の餡のやや多め

白鍵に触れてゆきたる冬日かな

啓蟄の窓

啓蟄の窓に向かひの家の窓

持ち物に名前を書きをり朝うらら

呼び鈴は椿の垣の奥にあり

最寄り駅より天頂へ春の虹

県庁の前のつつじも濡れてをり

縦横に木香薔薇の花と枝

矢車のまはる双眼鏡の中

肩甲骨よせて桜の実をあふぐ

懷中に時計の欲しき青葉冷

石垣を滴るごとく青蜥蜴

信長の花押は麒麟濃あぢさゐ

足裏に波立つ花呉座の編み目

最愛の金魚死なせてしまひけり

夕焼に秒針ばかりよく光る

青美しきとんぼ生れて亀のうへ

ひめしやらの若木の花の吹かれをり

あご紐の確とありたる夏帽子

峰雲の列南北に隙間なく

盆用意してをり金物屋も花舗も

雨降りに鳴きて寒蟬らしくなり

絵の中の地平の傾ぐ厄日かな

封筒に内封筒といふ秋思

秋風の骨董市となりにけり

爽天にシャツルコックの他はなく

十月の海うらがへす地曳網

富士に初雪セザンヌの忌と思ふ

短髪にすれば短き木の葉髪

休診の皮膚科の前の寒さかな

たい焼きを売る人鳩を見てばかり

手袋をわすれたる夜の歩き方

故人宛の葉書の未だ春の雪
手の内をさらに明かさず黒椿
紫木蓮寡婦の暮らしの庭下駄よ
重なれる薨の向かう桃の花
水温む喪に放心のゆるされて
降り続く雨に山藤色しづめ
海堂や雨に酔ふてふこともまた
陽炎うてうつつも夢かと思ふ
赤ん坊のこぼれさうな眸緑さし
若葉風嬰の涙を乾かして
もう何も映さぬ眼明早し
青葉若葉担ぐ柩の軽さかな
梅雨雲や嬰の火葬のゆつくり
梔子の花の香りの湿らへる
万緑や児の亡き乳を漲らせ
日盛りの部屋の暗きにゐたらしく
喪ごころに風を吹かしめ夕端居
花擬宝珠一字一石なる写経
沙羅の花無垢なるままに散りにけり
袖通す祖母の形見の単衣かな
冷酒にとうに忘れし夢をふと
夜もまだサルビアの燃え続くなり
木犀の香にアルバムを捲り初む
受け答へつつもひとりの後の月
日の差して黄菊白菊如意宝珠
不意打の冬の花火の遠こだま
クリスマスローズ絵のない絵本繰る
逝きし子の齢を数へ室の花
まどろみに声の聞こえて初明り
初鏡己と交はす約束も

左指す「戻る」のボタン去年今年

正月や牛の絵あらぬ牛乳瓶

寒に入る粘膜色の化粧パフ

錠剤にカナの印字や冬の梅

隣人の下手な口笛冬終る

前髪に測る湿度やクロツカス

徳利に洗へぬところ彼岸西風

森色のカーテンを買ふ四月かな

漆黒の堂の向かうへ蝶の白

夜桜や原付で来る元教師

古民家は木目だらけや桜餅

春昼や顔をはみ出す嬰の頬

絹莢を煮て褪せさせてしまひけり

建売のまた建つうはさ夏蛙

産直市出身の蚊でありにけり

白シャツを干すや鎖骨を思ひつつ

月曜は持ち物多し青時雨

ハチワレが花莫塵の花踏んでをり

苛々と読む条文や夜の蜘蛛

プードルの尾が慄いてゐる花火

同僚に若き夫あり蓼の花

やや痒き百会のとより獺祭忌

議事録に残らぬ欠伸秋の暮

その中に縞のパジャマも月見酒

秋深し噛み合せよきピンセット

二煎目の濁りを恃む夜学かな

早口の鳥が来てをり七五三

鼻毛抜く音おもしろき日向ぼこ

風呂の蓋巻くや柚子湯の登場す

振れぐせ強きコードが聖樹より

雲 変幻

旗雲や荒ぶる風の大どんど

朝雲の生絹のやうな弥生かな

春暁の雲を離さぬ山の稜

往く雲のぺらりぺらりと万愚節

訳もなく泣きたし春の雲ほかり

山の端を雲の逢引春愁ふ

雲雲の容放埒空海忌

すみれ色の春の夕雲祖母恋し

片雲の一つ生まれて春惜しむ

ビル群に雲の切られて空薄暑

峯雲の頂上湧きたての真白

雲雲の恋の活劇夏怒涛

文月や夕雲の端に滲み出て

逆らはず流るる雲の白の涼

しゃりしゃりと雲を積みゆく夏の天

横山へ雲の遁走夏果つる

八月や雲は虚ろの穴広げ

鰯雲しんがり役の魚消えさう

薄雲をかけ古鏡めく望の月

乗れさうな雲なく空の青爽か

片雲のことさら白く身に入めり

秋のすじ雲リュウグウノツカイめき

叢雲を往かせて白む後の月

出雲五句

神在の海原鋼曇りかな

神在の北の山山雲を吐く

凧や神名火山の雲隠れ

白雲と黒雲を編み時雨くる

雲雲の解かれ結ばれ空小春

凍雲の動かぬ天のざらざらす

大空を雲の大橋大晦日

あをぞらのすみつこにゐてあたたかし

春の山寝かせて量る赤ん坊

ものの芽やみなばんざいの容して

喉仏まだなき子らや燕来る

交番に間借りしてゐる燕の巢

子の数の帽子が囲む蝌蚪の国

湧き上がる力いたたく桜かな

ネモフィラの一枚畑や揚雲雀

水に差す鉄のほひのゼラニウム

たつぷりと時間を食むやなめくぢり

白南風や原色のものばかり干し

そろばんの指がするする瑠璃蜥蜴

水鉄砲まづは地面を打つてみる

だぶだぶの軍手の子らも草むしる

堂々と批判してゐる開襟シャツ

前髪の張り付いてゐる汗のかほ

仙人の落ちて来さうな熱帯夜

扇風機回つてだれもぬ豆腐屋

新涼や古民家カフェの床の照り

百舌鳥なくやキッチンカーに湯気立ちて

終ひには腹ばひで描くほうせんくあ

バリスタの傾く肩や秋うらら

暇つぶすやうに泣く子よ秋の暮

中秋やチェロの呼吸に合はせ弾く

転調のあとの転調大夕焼

シーソーの片がは木の実五つほど

大根干す母をまるごと日が包み

そのうちに根の生えさうな雪達磨

青空が伸び縮みせるどんだの火

産みたての卵に羽毛春隣

花の雨

白黒の薔薇一輪のプロポーズ
ほととぎす夜は深海を塗り潰す
ハンカチの上へ動物ビスケット
先生の触らせてゐる蚯蚓かな
蛍籠七つの星を散りばめし
二枚舌へ氷菓の色の移りけり
虹いつも第一発見者となれず
八月や両手にすくふ忘れ潮
撫でてゐる菊の福助づくりかな
本棚の余白に秋思ひとつ分
新宿の夜の明けてくる紅葉かな
黒髪に戻るスプレー文化の日
秋の夜や人肌になる哺乳瓶
昼間から酒呑んでゐし神の旅
着水の鳴の水掻き全開す
小児科の点滴終はるまで冬芽
痒さうなマフラー編んでゐる途中
絵双六到底買へぬ家を買ふ
白息の集ふ校庭五百人
陣痛の波の三寒四温かな
二月礼者日付変更線越ゆる
鍵つ子の先づ淡雪の髪を振る
触れられて熱あると知る朧かな
親鳥の春の光の口うつし
掌のコインの失せし日永かな
春昼や一人暮らしの北枕
太陽の波立つてゐる芽吹かな
誰の箸かも分ならず花見かな
東京の離れてゆきし朝桜
花の雨花ひとつづつ弾きけり

春潮を遠くに駅の塵帚

料峭や革の凶鑑に粉吹きて

制帽の星に翳りや不器男の忌

のつけから投資の話彼岸河豚

行員を終へ花守の父の椅子

塔頭の影の汀を坪堇

子猫洗ふおほかた芯の体つき

裸婦像の胸を見上ぐる五月かな

はりはりと玉葱の皮剥け落ちぬ

小児科に声のいろいゝ梅雨晴間

尺蠖の腹に脚無き孤独かな

大楠に走り根あまた夏祭

灯台の影に白靴立っておける

剃り残しなぞりて夏の旅半ば

窓に置く薬の小瓶遠花火

蒲の絮鳥は光を散らすもの

長靴をさかしまに干し秋茜

濡縁に休職の人小鳥来る

鼻声のごとき色して濁り酒

ペン立てにペンの沸き立つ良夜かな

鴨や野点の傘の濃くれなる

ななかまど裏手に陶器小商ひ

老象の中空へ鳴くあふちの実

小春日の猫の鍵尾のほの絡み

池涸れて幾つか杭のふてぶてし

冬ざれや遠く如雨露の柄の乾び

突然にももの投げ入るる焚火かな

冬うらら舟のかたちのカレー皿

すが漏りや骨・腸のいつしよくた

枯野道杖突く人の後手を

水切の小石選りたり猫柳
テチと跳ね水切の石春浅し
花待つや橋の裏なる水照りの斑
雉鳩のこゑに濁りや朝桜
老桜の一枝伸びたり畑のうへ
鶏小屋の掛金かろき残花かな
蓬わかば摘むや根元の土おさへ
背伸びして替ふる電球夕蛙
春月や足場丸太に木の匂
表札のタイル光れり松の花
質文の蝶の淡黄春ゆくか
塩つまむ指三本や新樹光
串に貫く山女魚ののんど齒列密
飯炊けて鳴る電子音梅雨夕焼
雲の峰山羊踏みし草立ちなほる
干しものの早や乾きたるカンナかな
鉄塔に鳶職五人秋の空
玄米噛めばプツと齒ごたへ賢治の忌
かなかなや手帖の天の昏き金
用箋の美濃和紙にほふ夜長かな
卓袱台に木目の渦よ十三夜
川風や芭蕉稲荷の返り花
冬眠のてんと虫群る夢たがへ
聖樹点燈せせらぎに似てハンドベル
合唱の歓喜の歌よ枯木屋
ロザリオの珠の黒檀去年今年
拉麺にもやし透けをる深雪かな
春風や銀細工並べ露天商
ぬぐふとき泪つめたし沈丁花
天心の青に吞まるる雲雀かな

梅東風や麒麟の像の四肢を抜け

五線紙の筆跡疾し蝶の昼

獺祭や税理士の眉よく動く

寄居虫のえらばぬ貝が吾の貝

鶉色にオカリナ焼かる春の雲

茶摘女の散らばつてゆく朝まだき

貫入の止まぬ八十八夜かな

牡丹や諸手を分かつごと崩る

筍流しあうらの掴む獣みち

銀泥の川と流るる扇かな

棟梁に曲げるものなし糊浴衣

水中花蜂一匹の死とありぬ

釣り人の山女をのがす掌の大き

海光や砂吐きつづく蟹の穴

あの坊さんうちの坊さん草の市

秋蝶の渡れる沼にふれさうな

寄合や二百二十日の眉宇揃ふ

鴟の声吾が胃ひしやげてありにけり

流木のくぼみに秋の潮乾く

踏み入りぬ相続人のなき花野

秋繭を繰れる少女の変声期

茹でこぼす小豆に鼻孔ひらきけり

車窓より突つこまれたる葱匂ふ

寒犬のずるずる舌をしまひけり

心臓の模型開くる手十二月

冬麗やほつる金の栞紐

いかのぼりわれを忘れてをりにけり

冷たしや後生車の揺れもどる

熊鷹は湖一枚を緊めてをり

黎明やあはひ満ちゆく霧氷林